

いまなぜ「儒教文化圏」が注目されるのか

中嶋嶺雄

東京外国語大学教授

日本、台湾、韓国など東アジアの儒教文化圏が著しい経済発展で今世界の注目を浴びている。儒教文化圏諸国の将来の発展の可能性も極めて高いといわれる。日本でも中嶋教授を中心とする「東アジア比較研究」グループが文部省の補助金を得てこの地域の研究に本格的に着手した。

「東アジア比較研究」のスタート

—今年度から文部省の科学研究費補助金の重点領域研究がスタートしました。その人文・社会科学分野で中嶋さんが研究代表者をなさっている「東アジアの経済的・社会的発展と近代化に関する比較研究」(略称「東アジア比較研究」)が採択されたそうです。

中嶋 文部省の科学研究費は、日本の科学研究活動(R&D)を公的に支えている研究費です。その額は五百億円ぐらいです。その中で今年度から発足した重点領域研究の総額は四十六億円です。これは、社会的ニーズの高いもの、学際的な共同研究を推進しなければいけないもの、そういうものに対して重点的に研究費を配分するというのが、そもそもの趣旨です。従って、わが国の科学研究政策の一つの反映でもあるわけです。それだけの費用を重点的に投与するのは、個別的に少しずつお金がバラまかれるけれども、あまり重要な研究成果が出ない、あるいは、全国の国立大学や公立の研究機関や私学がみんなて少しずつ文房具や備品を買う、しかしその総額は膨大であるという「巨大な無駄使い」を避ける意

味からだともいえましょう。ただし、そのためには、各学部の権威から成る学術審議会の何段階もの審査を受けるわけです。

— どういう審査のプロセスがあるかという、私どもの場合、まず昨年度において、重点領域研究として「東アジア比較研究」が必要であるという題目決定がありました。題目を決定するために、書類審査やヒアリングなどいろんな審査を受けました。その結果「東アジア比較研究」が社会的ニーズに合い、しかも学際的な研究を必要とするものであるという評価を得ました。

— そういうプロセスを経たうえで、当該学部の専門家の中で私が代表になりました。この分野の優れた研究者をあらかじめ組織しました。それを「計画研究」と言い、重点領域研究の中心になるものです。

— これだけだと公平を欠くこともあるので、それに対して公募をするわけです。課題はもちろん「東アジア比較研究」です。それには、かなりの件数の応募がありました。その中から「計画研究」との関連で重要なもの、「計画研究」では抜けているもの、あるいは非常に優れた研究でぜひこの研究を採択したいというようなものがまた審査をして決められました。そこで「計画研究」と「公募研究」が一つになっ

て「東アジア比較研究」というプロジェクトが始まることになったわけです。これは、年間五千七百万円ぐらいの予算ですけれども、人文・社会科学分野では唯一のプロジェクトなんです。

— ということは、逆にいうと、日本の研究開発費科学研究費の配分がいかに自然科学中心になっているかということですか。四十六億円の予算のうち、四十四億四千三百万円は全部、人文・社会科学以外の分野なんです。

— ほかにどういう研究があるかという、例えば、癌研究、宇宙工学、バイオテクノロジーなどです。

— そういうものも確かに社会的ニーズの多い研究であって、それらの研究はすくお金がかかるのでそちらの方に費用が多く投与されるということになるわけです。人文・社会科学はお金がかからないといえはそれまでですが、例えば国際学術交流や海外調査も大いに必要なわけで、この点はわが国の科学行政の大きな問題点だといえましょう。

— それだけに、人文・社会科学の中で、われわれのプロジェクトが唯一のものとして採択されたということは、ある意味では非常に大きな意味を持つでしょうし、それだけに世間の注目を浴びざるを得ないわけです。



世界経済の中心を狙う 東アジア

——「東アジア比較研究」の第一回全体会議が七月十日から十二日まで大磯プリンスホテルで開かれました。ここで中嶋さんは基調報告をなさいました。題名は「東アジア比較研究の課題と展望——いまなぜ『儒教文化圏』か」ですが、これは、今後の研究の一つの方向づけになったわけですか。

中嶋 研究代表者として、「まず傀より始めよ」と問題を提示したのです。ただし、まだ研究が始まったばかりで、これから三年間かかって研究をやるわけですから、私の問題提起は一つの方向づけではあり

ますが、それで結論の方向を既に決めていくということではありません。

——「東アジア比較研究」を研究テーマに選ばれたのはどんな理由からですか。

中嶋 今や国際社会の中で、日本をはじめとする東アジア（アジアNICSなど）が経済的にも、社会的にも非常に活力を秘めていて、今後も成長する地域であるということは内外からいわれています。世界経済の重心は明らかにこの地域に移っています。アメリカを中心として欧米先進国が世界経済の重心であるという時代ではなくなりました。ですから、私年ぐらいを境としてそうになりました。ですから、私は、この地域が今後二十一世紀にかけて世界の経済の中心を担っていくだろうと思います。

そうなりますと、なぜこの地域がこんなに成長を続けるのかということは大きな研究課題だと思います。それにこたえようという気持ちがあったと思います。

もう一つは、この地域には中国という巨大な存在があるわけですが、この中国が一体どうなるのか、つまり、はたして中国の近代化はうまくいくのかどうかという問題があります。私が見るところ、中国の将来はかなり難しい問題を抱えています。他の東アジア地域と比較するとそのことが歴然とします。日本は一人当たりGNPが今世紀末には二万ドルぐらいになり、世界のトップに立つわけですが、台湾、韓国、香港、シンガポールいずれも一萬ドル前後になるだろう、あるいはそれを超えて現在の日本、あるいはそれ以上になるだろうと思われれます。そうすると、これは大変な問題になります。つま

り、同じ東アジアでも大陸中国を中心とする社会主義圏と、資本主義圏との間にもすごいギャップができます。日本、台湾、韓国は今世紀末には恐らく

世界のGNPの二〇%ぐらいを占めるでしょう。人口も二億ぐらいになるでしょう。ですから、この三国だけでも、今のアメリカが世界で占めている地位とほぼ同じぐらいになります。ということになると、ここがますます重要になります。

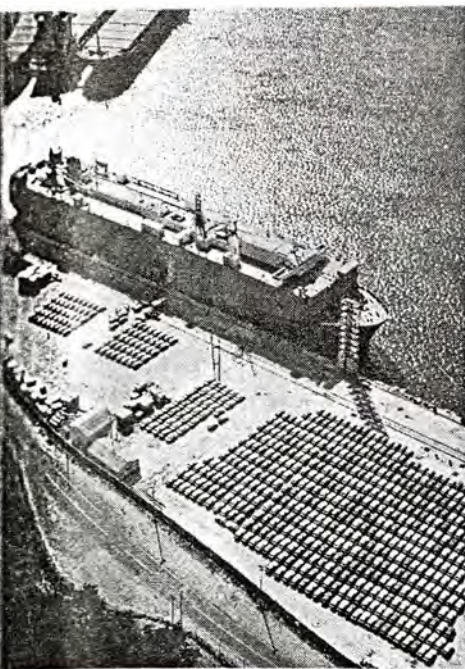
——しかし、東アジアの資本主義国がはたしてこれからも順調に経済成長を続けることができるかどうか。最近、世界恐慌が来るんじゃないかとよくいわれています。

中嶋 最近の狂乱的なスペキュレーションなんかを見てみると、世界恐慌になってもおかしくない、しかもアメリカは経済がガタガタして、世界最大の債務国になっているというようなことから、ひよっとすると世界恐慌が再来するんじゃないかという議論はあり得ると思います。しかし私はそうではないという意見です。その理由の一つに、第一次大戦後のように、アメリカが勃興期にあつてアメリカ経済が中心になっていた時代じゃなくて、今や、世界経済の中心が日本であり台湾であり韓国であるという状況ですから、そこがしっかりしている限り、世界恐慌は避けられるんじゃないかという気もするわけです。

そういうことを含めて考えてみて、この地域の持っている歴史的、社会的な共通性をもう一遍照らし出してみる必要があります。そういうふうには考えますと、この地域は、シナ文化圏でもあるし、同時に漢字文化圏でもあります。もっと文明論的にいえば、儒教文化圏です。

儒教の読みかえ

——儒教文化圏といっても、現在では、儒教の社会や政治に及ぼす影響力は昔に比べると格段に弱くなっているのではないですか。それが経済的發展には



たしてどの程度寄与しているのか。

中嶋 マックス・ウェーバーの理論に従えば、儒教は、近代資本主義の発展をむしろ阻害するものであって、古い封建的な形式的な束縛をもたらすという。逆にプロテスタンティズムが、ヨーロッパの近代資本主義を支えたという。つまり、それは一種の禁欲主義であり、同時に現実を変えていかなければいけないという責任倫理であって、現実に対して批判的になる精神が資本主義という新しい時代を導いていったという議論です。

儒教は、そういうウェーバーの理論とは非常に対照的な理論になるわけです。ウェーバーは儒教についても非常に造詣が深いわけですが、結局彼は、儒教の現状肯定的な精神では資本主義は発達しないという結論を下しています。

ところが逆に、儒教的な倫理なり規範が、どうも経済の発達とか近代化に非常に役立ってきたんじゃないかという議論が出てきています。どうしてそういう議論が出てきたかというところ、この地域がなんともいっても経済的に活力を持っているからです。もしこの地域がだめならそんな議論は出なかつたと思いますけれども、この地域はこれからまさに世界の中心になっていくということで、気がついてみたらそこが儒教文化圏であるということなのです。

ということは、何かそこに儒教文化の伝統との関連性があるのではないかということ、アメリカ、フランス、韓国、台湾などでも注目しています。例えば、最近出た本では、フランスの東洋学者のレオン・バンデルメルシュ教授の『新しいシナの世界』（日本では『アジア文化圏の時代』と訳されています）や、韓国の金日坤教授の『儒教文化圏の秩序と経済』とか、アメリカのコロンビア大学のドバリー教授の『朱子学と自由の伝統』が出ています。

ドバリー教授はこの本で、儒教の読みかえを行っています。例えば、朱子学というと、いわば江戸時代の体制の学問であって、むしろ陽明学が革命の学問であり、儒教の新しい流派であるから、朱子学は、束縛や拘束や形式や国家的な権威につながっていくという従来の議論に対して、いや、朱子学の中にむしろ非常に自由な精神があったという意見です。

こういう意見は日本の近代実業思想、例えばその代表である渋沢栄一のお思想にも見られます。彼は「論語と算盤」という本の中で、當利と、儒教という「仁」とか「義」は両立するという立場から儒教を読みかえています。

新しい産業社会の形成 にメリット

そう思ってみると、例えばこれらの国々は、よくみんな勉強する国ですね。日本、台湾、韓国は文盲率がゼロなんです。そのかわり受験競争も激しい。その弊害も語られる反面、それが社会全体の知的水準を非常に高めています。そして、教育熱心です。

私はそういう国を、「学習国家」と言っています。そういうことが近代ビジネスの発達につながっています。

それから、これらの国々は一種の家族集団主義で

す。これは、日本や韓国の財閥が形成されるプロセスを見てもそうだけれども、儒教的な倫理からくるわけです。そういうところにも非常に企業活動のメリットがあります。

そのほか、いろいろな要素がメリットとして考えられると思います。例えば、実学的な精神、経験主義もそうです。日本人はあまりそういうことを言わないんですけど、外国では期せずしてそれについてかなり高度なアカデミックな議論が出てきています。ですから、外国でさえもこのような問題提起があるわけです。当の日本人もこの問題をどう考えるかということ、学問のうえでも追究してみる必要があるんじゃないかということですね。

例えば、「中庸」の精神とか「和」の精神も企業活動の大きな力になっているんじゃないかと、いろいろの解き方ができるわけです。これからの時代は非常に知識集約的な産業の時代になっていくわけですから、儒教的な伝統が、新しい産業社会の形成に生きていくんじゃないかという見方ができるわけです。

しかも、そこで根本的に重要なことは、儒教は非常に寛容なドクトリンだということなんです。イスラム教とかカトリックは排他的な一神教で、ほかのドクトリンと絶対に相容れないわけですが、儒教の場合、日本では仏様と神様と一緒に共存できるし、中国では道教と表裏一体であった。しかも儒教は厳密な意味での宗教じゃないんです。これは一種の倫理規範なんです。

私の家では、インドネシアから来た留学生を一年間ホームステイでお世話したんですけど、非常に敬虔なイスラム教徒ですから、一日の中でイスラム教の神の子として仕える時間が極めて多いわけです。そういうところを見ると、儒教圏の人たちは、

宗教上の束縛が少ないと思います。このような現実

は近代的なシステムの中にうまく適応できるし、同時に、社会的な規範、ルール、秩序をうまく保つことに役立ちます。自分は論語をろくに読んだことがない、あるいは儒教を学んだこともないと言う人が多いにもかかわらず、それらの国民もおのずと、儒教的な倫理ないしそういう精神風土の中に生きていくことは事実だと思います。

儒教はヨーロッパの個人主義ともずいぶん違うし、ヨーロッパの合理主義とも違います。ですから、こういうような問題を通して、儒教文化圏というようなカテゴリーを設定することが妥当であるかどうかということこれをこれからわれわれは研究したいわけです。

もちろん、われわれは儒教の研究をやるわけではありません。東アジアの近代化をいろいろ比較する過程で儒教文化圏というような枠組みが可能かどうかということを探っていきたいということです。

私自身は、今のところ儒教文化圏だから必ず経済発展に成功するとは言えないと思っています。例えば、中国大陸はいまだに社会主義のシステムの桎梏から逃れられないがゆえに経済がうまくいかないわけです。

また、日本が発展したのは、それなりの時代環境があったり、日本自身の固有の歴史的、社会的背景があったからだと思います。そういうものを全部総合して検討する必要があるわけです。

ただ、この地域が将来、非常に大きくクローズアップされてくるということになると、東アジアとは何かというアイデンティフィケーションが必要になると思います。その時に気がついてみると、それは一つの儒教的な文化であり伝統であったということもがもっと積極的に言えるかもしれないという気が

します。

日本だけが例外である 時代は終わった

——儒教国ということと共通性があるということですが、そのほかアジアの場合は稲作とか食事の時に箸を使うという共通性もあると思います。米作りは、丹念さ、几帳面さ、勤勉性を育てるが、こういう性格は品質管理の向上に向くのではないかという見方があります。ところでこういう同じ文化を持ちながら、アジアの社会主義圏の発展が遅れているという現実があります。そういう体制の違いは、同じ風土や文化の中でも決定的な要因を持つてくるということでしょうか。

中嶋 そうだと思えますね。ですから社会主義ではうまくいかないということも、ほぼ結論が出てきていると思えますね。それと同時に、従来のいろいろな近代化モデルがみんな挫折しました。社会主義も大きな意味では一つの近代化のモデルだったと思います。それも結局だめだ、マックス・ウェーバーの理論もだめだ、アメリカ的な近代化論もいろいろ問題が出て当のアメリカもガタガタしているということになると、アジア的な近代化のモデルをつくっていかねければならないんじゃないか、そういう立場から新しい理論的な構築が必要なんじゃないかと思えます。

近代化というと、従来、日本だけが例外だと思われていたんですね。ところが今や、台湾も韓国も日本をここまで追いついてきているわけです。日本だけがアジアの中で例外だ、日本はヨーロッパの文化を明治維新以来うまく吸収してきたというのが従来の近代化論だったと思えますけど、はたしてそうかという、台湾、韓国、香港、シンガポールなどア

ジアの国々は、日本を見習って日本に追いつき追い越せみたいな感じですから、日本だけが例外である時代は終わったという気がしますね。

私は、儒教文化圏という伝統的な精神風土があった、それプラス、「ニッポン文化圏」ができてくるような気がします。台湾、韓国、香港、シンガポールに対しても、中国に対しても、今、日本の影響はものすごく大きい。伝統的なシナ文化圏ないし文明圏と、現代的な「ニッポン文化圏」がミックスしたうえで今の東アジアの成功があるんじゃないかという気もしています。そのへんも今後追究してみたいと思います。

——箸を使う文化ということも儒教文化圏はある程度の共通性があるわけですが、特に箸を使うということは手先の器用さに通じて、これからのハイテク化社会とか情報化社会に対して適応がスムーズにいくということが考えられます。特に日本人の場合、小さいものとか細かいものを扱うと非常に優秀性を発揮するといわれています。そういう点を考えますと、二十一世紀の国際社会の中で東アジアでも特に日本、それに追いつこうとしている台湾、韓国が存在は非常に大きいと思えますね。

中嶋 現に、日米貿易摩擦とさんざん言われているけど、アメリカは日本とだけ摩擦を起こしているんじゃないんですよ。アメリカは台湾や韓国に対して大幅な貿易赤字を出しているんですね。しかも、これらの国々は何をアメリカに輸出しているかというと、マイクロエレクトロニクスであり、バイオ製品です。あるいはコンピュータ、自動車まで出しはじめているわけです。ですから、アメリカとアジアの関係は逆転しちゃったと思います。そういう状況の中で、今後、知識集約型、あるいは、マイクロエレクトロニクスの時代が来るといふようなことを

考えますと、手先が器用で、しかも知識水準が非常に高いこれらの国々の国民性が、今の時代に非常にフィットしているという感じはしますね。

もちろん、そこに日本のこれからの課題もあります。私は、日本人は、儒教文化圏、ニッポン文化圏で大いに発展しているからおごり高ぶっていいというつもりは全くない。また、同時に、一種の時代錯誤的なアジア主義に回帰して欧米を見下すこともよくないと思います。

日本はこれから自分たちが例外でなくなった時代に、自分たちのあり方は何かということ、あるいは今日の豊かさの中身を精神的に追求していかなければいけないと思います。しかし、今おっしゃったように、日本人はとにかく器用であって、きちんと物事をやります。アメリカの月曜日につくった自動車は買うなといわれます。これは、休暇をとったあとで、あちこちのネジも緩みっぱなしだということがよくあるという意味ですが、日本的な技術集約型、知識集約型の構造の中ではそういうことは考えられないですよ。

もちろん箸を持つ文化でも、中国の長い竹の箸、日本の木の割り箸、韓国の細い銀の箸、それぞれ個性はあるし、文化的な違いもあります。にもかかわらず、箸を持つということと共通した技術の高さという点につながると思います。

梅棹忠夫さん流にいうと、鍛冶屋にしても江戸時代の技術が非常に高かったけど、それは縄文時代以来そうだったという議論もあり得ると思います。そこまでさかのぼらなくても、戦後だけを見ても、この地域のビジネスなり経済なりが相対的に非常にうまくいっているという事は否定できない事実でしょうね。

——中国人をはじめ東アジアの人たちが、アメリカ

とかオーストラリアに移住していますが、彼らはそこでも民族性を発揮して、その地域をある程度活性化するように働きをしています。

中嶋 そうですね。それは二つの意味があると思います。つまり、中国人は優秀だということ。ただ、じゃあどうして大陸はうまくいかなかったかということ、社会主義の制度の極端があるからです。しかも、東南アジアの華僑社会もそうですが、オーストラリア、アメリカ、それも特にカリフォルニアのような中国人とかアジア人が多いところが、同じアメリカでもこれからの経済の活力を担っていくんじゃないかという気がしますね。その点ではマレーシアも人口の半分近くはチャイニーズですから、そういう国もASEANの中ではかなり発展の可能性があると、いえなわけではない。

いずれにしても、今おっしゃったようにアジア人がそういう意味で見直されてくるんじゃないでしょうか。

文化宿命論を排す

——研究グループの中には、儒教文化圏を強調しすぎると、東アジア民族の優秀性を過度にフレームアップする結果になり、排他的ナショナリズムを生むのではないかと心配する人もいますよね……。

中嶋 儒教文化圏という発想は、慎重に使われないと、文化宿命論みたいになって、かつてのナチスドイツがゲルマン民族の優越性を誇ったようになっちゃう危険性があります。その点は、今の開かれた知的文脈で考えているので、そういう方向づけになるとは全く思わないし、第一そんな発想はこれからの国際社会に役に立たないと思います。だけど、国際社会の中でも、台湾にしても韓国にしてもここまで

伸びてくるという予想はほとんどなかったと思います。それがこんなに伸びてきました。特に台湾は、

公式に国家として認知されないような状況なんですけど、まさに民間の時代の国際版として、民間のチャネルでもすごく成功しているわけでしょう。この問題も無視できないですね。ただ、台湾、韓国もまだまだ大人にはなっていないわけで、特に韓国などは虎と目するムードが非常に強い。私の『21世紀は日本・台湾・韓国だ』という本（第一企画出版）も、台湾と韓国でたちまち海賊版が出ており、たまたま四種類が私の目につきましたが、筆者である私になんの連絡もない。しかも、韓国の場合は『21世紀は韓国・日本・台湾の時代だ』と韓国を先に持ってきています。台湾の場合も『21世紀は中・日・韓の時代だ』となっています。こういうことで日本と競わなければならないという問題がある限り、まだまだ大人にはなっていないなあという気もします。

——ライブル意識むき出しという感じですね。

中嶋 一種の勃興期のナショナリズムです。それはよく分かるんだけどね。ただ、今世紀末ぐらいになると、韓国も台湾もその点でも随分落ち着いてくるんじゃないかという気がしますね。

——韓国でも台湾でも経済発展に伴って中産階級がどんどん増えています。当然民主化意識が強まってきますから、時間をかければ、わりと妥当なところへいくんじゃないでしょうか。

中嶋 そう思いますね。



〔中嶋頼雄氏〕

昭和11年松本市生まれ。東京外国語大学中国科卒。東京大学大学院国際関係論課程卒。現在、東京外国語大学教授（国際関係論・現代中国学・アジア地域研究）。社会学博士。この間外務省特別研究員（在香港）、オーストラリア国立大、パリ政治学院の客員教授を歴任。「北京烈烈」でサントリー学芸賞を受賞。